

ふえおりの元気印

2006年3月刊 発行:地域づくりネットワーク福岡県協議会

報告

第4回福岡県地域おこし研修・交流会(筑豊地区)
第23回地域づくり団体全国研修交流会(沖縄)



福岡県の「げん木」 シリーズ③

真名子(まなご)のヤブツバキ

二丈町の山中に、地元の一部の人しか知らないヤブツバキの巨木がある。標高400m、数戸の集落がある一角の古川富香さん方に、この古木は八方に堂々と枝葉を伸ばしていた。樹勢よく、衰えは見られない。樹高9.4m、幹周り9.35m。主幹は根元から6本に分かれ、さらに27本に枝分かれして、こんもりと大きな樹型をなしている。さて、樹齢だが、二丈町教育委員会では「不詳」という(同町保存指定樹木)。だが、これほどの巨木は滅多にあるものではなく、他県の例から樹齢700年と見る向きも。訪れた時(2月末)は、あまりにも樹型が大きいので、盛りの無数の花が赤い点々のように見えた。場所は夏のキャンプ場にぎわう「真名子木の香ランド」の近く。

報告

第4回福岡県地域おこし研修・交流会

「開かれた大学」を核に 再発見

テーマ 「住学協同による地域おこし」

筑豊地区

第4回「福岡県地域おこし研修・交流会」は2月25日、飯塚市の近畿大学産業理工学部で開かれ、県下の地域づくり団体の代表者や行政関係者など約70人が参加。大会テーマ「住学協同による地域おこし」を巡って活発な事例報告と意見交換が行われた。その内容は、ひとことで言えば、大学と地域住民とのコラボレーション（協同、協働）。ユニークで、かつ建設的であり、他地域が学ばべき多くの示唆に富んでいた。

筑豊地区で2回目を迎えた本大会は、前回までの大会とは内容的にも形式的にも興きを異にしていた。参加者は午前中、6回目を迎えた「筑豊いづか雛のまつり」を視察して回った。メイン会場の飯塚コミュニティセンターを始め、市街地の各商店街には江戸期の古いものから「からくり人形」など一体、いくつあるであろう!? 沢山の展示があつて参加者一同、そのスケールに圧倒された。飯塚の歴史は蓄積が深いのである。



にぎやかで活発なパネルディスカッション。本田さん（立つている人）が頭の体操を教えてください。左からコーディネーターの久門さん、パネリストの野見山さん、本田さん、宮嶋さん。

午後1時半から開会。まず、主催者側

を代表して「地域づくりネットワーク協議会」の中村仁彦副会長（福岡県地域政策課長）が挨拶。続いて、地元を代表して同学部の小野正行学部長が歓迎の挨拶。直ちに本題に入り基調講演。大会テーマの「住学協同による地域おこし」に関連して同学部の教授・前学部長、菊川清先生の講演が始まった。

基調講演 出会いと交流の プラットフォーム 持ちつ持たれつ (Give and Take)

菊川先生は、のっけから言った。「住学協同という言葉、皆さん、なじみがありますか？」会場からは「ない」。「住」は「住民」のこと。「学」は「大学」のこと、つまり当地では近畿大学のことである。

そこから本題が展開した。似た言葉だが「産学協同」というのがある。こちら

はマスコミ用語でも周知済みだが、「住学協同」という言葉は、その認知度は全国でも0%に近い。

1988年2月、「筑豊ムラおこし・地域づくりゼミナール」開講のための発起人会が飯塚市にある近畿大学九州工学部（当時。現在の産業理工学部）に要望書を提出した。「地域づくりのリーダー養成のために、会場の提供と理論的指導をお願いする」。それを快く引受けた同大学。こうして発足した「筑豊ゼミ」は既に18期生が巣立ち、卒業生は延べ1500名を超える。彼等はそれぞれ各地で地域づくりのリーダーとして活躍している。一方、「民」の側でも独自に住学協同機構「筑豊地域づくりセンター」を立ち上げ、大学との連携を深める。菊川教授は「筑豊砂漠」に井戸を掘り、水を引いた」と、「自立、自助」の将来の可能性にも言及して結んだ。



基調講演をする菊川教授

1昨年6月、同大学を始め、飯塚市や九州工大などが共同提案した「e-ZUKAトライバレー構想」が経済産業大臣賞を受賞したことは記憶に新しい。筑豊地区は新構想のもと新たな地域づくりに取組む。

パネルディスカッションのメンバー（敬称略）

コーディネーター 久門守（近畿大学産業理工学部客員教授）
パネリスト 宮嶋玲子（筑豊地域研究会会長）野見山ミチ子（NPO法人直方川づくりの会理事長）
本田京子（筑豊市民大学実行委員会委員長）

パネルディスカッション

「実践！住学協同による地域づくり」

(パネリストらのご紹介は右頁下に掲載)

久門 3人のパネリストの方々、それぞれ永い間、地域づくりに取組んで実績を上げて来られたのですが、共通点がある。それは筑豊ゼミの卒業生であること、次に女性である—ということ。その辺に何か筑豊の地域づくりのヒントのようなものを感じます。

野見山 私は筑豊ゼミの1期生で、「住民自治」を始め、以後10年間、勉強させて頂きました。私は「筑豊は遠賀川を語らずして、語れない」と仲間と「直方川づくりの会」を結成した。「川に50年後の夢を託そう」と夢プランを何度も関係方面に働きかけ、1昨年10月、ようやく「遠賀川水辺館」の建設が実現しました。国交省が建設してくれ、直方市に委託、私もNPO法人が運営に当たっています。悲願が実った水辺館は2階建て。そ



若い人の参加が目をつけた。マイクは、鞍手高校3年生の坂本真啓君。「遠賀川水辺館」で学び、この3月、メキシコで開かれる第2回世界子ども水フォーラムに日本代表の一員として参加する。本文参照。

れこそ小学生から大人まで自然体験学習の核となる施設で、地元の人達の貴重な交流の場ともなっています。

宮嶋 私は主婦として家庭に暮し、社会性がなかったのですが筑豊ゼミ4期

私が考える 地域づくりの キーワード

生に参加させて頂き、女性の社会参加や「女性学」という学問分野に新鮮な驚きと興味を持ちました。多くの知人、友人を得ました。2003年10月まで飯塚市の教育委員を2期8年、務めさせて頂きました。

現在は、「女性学」があるなら「筑豊学」と「筑豊地域研究会」を立ち上げ毎日、大変楽しくバタバタやっております。午前中は、皆さまにご覧頂いた「筑豊いづか雑のまつり」、あれも「商店街の空き店舗対策の一助に」とまず、地元のお女将さん達に呼びかけて始めたものです。

本田 私はもともと好奇心が強い方なので筑豊ゼミの8期生に入りました。講義は地方自治などでしたが、難しくて良くなかった。とにかく頑張って修了しましたが、もっとわかりやすいものを、

と田川で未来塾を立上げ、さらに地元にある福岡県立大学に働きかけ、大学の公開講座の実行委員をしたり、あれこれやっております。

現在、筑豊市民大学の実行委員長として第5期の学生募集中です。場所は福岡県立大学で、同大学の後援も頂いております。

「わたしが変われば周りが変わる 周

野見山さん……「地域自慢」
宮嶋さん……「連携」
本田さん……「学ば

りが変われば地域が変わる 地域が変われば社会が変わる」——これが私の信条です。

久門 少しイジワル質問をします。まづ野見山さん、遠賀川はきれいですか？ 自慢できる川ですか？



開会に先立ち「田川チヨウ大好き「ママCHANズ」」の皆さんによる躍動感あふれる創作炭坑節が披露され、大会を盛り上げた。

野見山 いや、自慢したいですね。他にないから。川は私たち人間の生活のせいでボロボロになった。少しでも「恩返し」しようと思います。

幸い、水辺館が出来て若い人も集まり『青少年博物学会』が全国組織として成立しました。今日はその高校生達が会場に来てくれました。私にとっての「希望の星」です(会場から拍手が起き、野見山さんは感涙にむせぶ。さらに大きな拍手の波)。

久門 次に本田さん。いろんなことをやっていらっしゃる。どうして大学にこだわるのですか？

本田 ひとことと言えば「学んで自分が変わる」からです。近畿大も県立大も受け入れてくれる。大学の先生方を始め、いろんな方々とのご縁も出来る。素晴らしいことです。

久門 宮嶋さん、「筑豊学」の成果は？

宮嶋 筑豊は、とにかく負のイメージで語られるが、私達の住む生活場所です。中央志向をやめて筑豊の再評価に私達が力をつけないと。産炭地の遺産も実は人に誇れるものが沢山あります。そういう新発見を追々と発信して行きたいと思っています。

久門 日本社会が人口減少の時代に入りました。コンパクトをキーワードにした新たな地域づくりが求められています。小さくてもホンモノ、これこそ地域で取り組むことができる目標ではないか。私はこの点に大きなヒントを感じます。

テーマ 美ら島・シマおこし大会 「いちやりばちよーでー 仲間づくり」 全国から 第23回地域づくり団体全国研修交流会 四百人参加

沖縄大会

今年で23回目を迎えた「地域づくり団体全国研修交流会」は2月10～11日、沖縄県で開かれ、地域づくりに取組む実践家や団体、行政関係者など約400人が参加。全体会のあと、同県下の17分科会の会場で現地視察や全国各地での数多くの実践報告があり、地域づくりの普段の苦勞や喜びが素直に語られ、熱い共感と交流の輪が広がった。参加者は口々に「良い勉強になった」と語り、明日へのエネルギーを蓄えて全国へ帰って行った。



全体会場での琉球芸能披露の一コマ。沖縄県芸術大学の「芸大琉球芸能専攻OB会」による演技で、若い世代が地域社会のたくましい形成者となっていることが実感された。

全体会は那覇市の沖縄県立武道館で開かれた。大会テーマは「美ら島・シマおこし大会」で、サブタイトルが「いちやりばちよーでー 仲間づくり」。独特の沖縄言葉には少し説明が要る。

まず「シマ」だが、シマには「島、離島」という意味もあるが、沖縄では「地元、地域」といった言葉としても使われる。「シマおこし」は「地域づくり」なのである。

サブタイトルの「いちやりばちよーでー」は「出逢えばみな兄弟」という意味である。ぜひ覚えておきたい沖縄言葉のひとつだと思ふ。

開会で主催者挨拶に立った地域づくり団体全国協議会の



石垣島での歓迎の第一幕は「白保子ども獅子舞」。子ども達もこれで地域づくり活動に参加している。獅子の外皮は芭蕉の繊維でつくり、中に子ども3人ほどが入る。ユーモラスな動きが楽しい。

第17分科会報告

「みちかな薬草を利用した健康で活力ある地域づくり」
健康で島が元気…多彩な取組み

伊藤善市特別顧問は「『いちやりばちよーでー』は沖縄の人の温かくやさしい心の表現。よく言われる『天の時、地の利、人の和』ですが、私は人の和が一番大切だと思う。今大会で沖縄の人々とはもちろん、全国の地域づくりの仲間と熱い交流を通じて、さらなる地域づくりの実をあげて下さい」と結んだ。

最後に沖縄県の各地での地域づくり活動の様子が大スクリーンで上映された。全体会を終え、参加者一同は各地の分科会会場へ向った。

会場・石垣島

那覇空港から南西ヘジェット機で50分。

石垣島は人口約4万6000人。真冬でも最低気温が10度を下回ることはない亜熱帯の島だ。私たちが島を訪れた日も最高気温が24度もあって、驚いた。ハワイと同緯度だ。日本最南端の八重山諸島の政治・経済の中枢にある島で、最近本土から、老いも若きも「第二の人生」を求めて移住を希望する人が多いと聞いた。

交流会場の石垣市健康福祉センターは堂々たる構えの立派な施設。大濱長照市長が元は医師と聞き、この島の健康対策に寄せる

読）が「青い海と空、魅力ある地域資源に恵まれた沖縄は昭和47年の本土復帰以来、美ら島、地域づくり・仲間づくりに真剣に取り組んでおります。その実態を今回、全国の皆さまに直かに知って頂き、交流を深めて下さい」と述べた。

来賓挨拶として総務省地域振興課の稗田

昭人課長が「今年で12年が経過したこの運動は、大学や企業も加わった新たなサポ

ト事業を国として用意しています」と報告。

続いて（財）地域活性化センターの小林実理事長が全国協議会の事務局であることと、サポートセンターの役割について自己紹介。

並々ならぬ努力と情熱を窺い知った。

歓迎セレモニーは白保地区の小・中学生による獅子舞で幕をあけた。三線と太鼓の響きにあわせて子供たちが演じるユーモラスな獅子舞に参加者一同、長旅の疲れも忘れた。

夕食。地元の婦人の皆さんが心をこめて作ってくれた、葉草やハーブをふんだんに使った料理の数々。ローズマリー、カモミール、ペンネル（ういきょう）、可憐な花・ナスターチョ（きんれんか）の花サラダ等々、早速、数々の葉草やハーブの名前とその活用法を知った。

その後、島に伝わる郷土芸能をたっぷり鑑賞した。演じるのは地元の皆さん。この島が芸能文化を大切に、育んでいる様子

がよくわかった。

2日目も盛り沢山のスケジュール。午前中は葉草の自生地めぐり。案内して下さったのは市民ボランティア団体「葉草・ハーブ文化をはぐくむ会」（前津栄信会長）の皆さん。島内の至る所に、雑草に混って沢山の葉草が数え切れないほど自生していた。長命草、月桃、雲南百葉、ギシギシ、カワラヨモギなど多くの名前を知った。土地の人はたいてい、庭の片隅に植えて食したり、花を賞でたりしているという。

論より証拠 薬膳料理の調理実習

午後は葉草農園で収穫体験。ウコンなどを掘り出して一汗かいた。このあと健康福祉センターに戻り、健康講話と事例発表。同センターの城所望医師が健康に暮す心得をわかりやすく、ユーモラスに語った。「食同源」は有名な言葉だが「身土不二」（生まれ育った土地の食べものをバランスよく食べれば健康に暮らせる意）という言葉をも初めて知った。

長寿で知られる沖縄だが、最近（2000年統計）、男性の平均寿命が全国26位に転落▽生活習慣病の増加など肥満と運動不足で「長寿おきなわ超ピンチ」の由。石垣島の健康づくりが各方面から注目されるゆえである。

さて、その「地域づくり・健康づくり」だが、島内3団体の事例発表があった。

・その1・「石垣市食生活改善推進員協議会」（宮良恵美会長、会員88人）。全国組織の石垣市での活動で結成18年目。健康な食生活を進めるためのグループ講習会などが活発で、最近「親子の食育教室」▽「在宅介護ボランティア講習会」などに力を入れる。石垣市との業務提携も盛んだ。

・その2・今回、葉草の自生地めぐりをし、頂いた「葉草・ハーブ文化をはぐくむ会」（前津栄信会長、会員120人）。3年前に「薬用植物を活かした街づくり」をテーマに発足。会員は元教員、公務員、自営業者、主婦などさまざまで、自身の実践を兼ねた野菜・葉草の栽培、土づくり、調理実習と活発。年会費500円ながら、市役所とタイアップして年1回の講習会には全国レベルの著名人を招くほか、年6回の講座を開くなど、きわめて意欲的。葉草見本園も整備されていた。

・その3・「いしやなざら（石垣）青年会」

（向井克会長、会員30人）。高校生も含む若い青年たちが2年前に立ち上げた。旧盆の先祖供養祭「アングマ」や豊年祭など、伝統行事や芸能を大事にするだけでなく、若者や子供、地元の多くの人が参加できるイベントを青年たちが先頭に立って始めた。今では地元の人気を集めている。

◆
フィナーレは健康福祉センターの調理室での薬膳料理実習教室。参加者全員が4班に分かれ①雲南百葉のチャンプルー②島素材（葉草）てんぷら③青パパイヤ入りハーブサラダなどを約1時間かけて調理。その後、心楽しく全員で頂いた。まことに恵まれた島のひとときであった。

次回大会は

11月10・11日

愛知県で開催

ホンモノづくりで村おこし。官も民も一致協力

久留米市ふるさと文化創生市民協会

地域づくり事業コーディネーター 草場 勝昭

第7分科会の研修・交流の場は「スタジオパーク南海王国・琉球の風」であった。ここはNHK大河ドラマ「琉球の風」（平成5年）の撮影施設。参加者全員が、なにか琉球貴族になったかの気分であふれに満ちた。

まず、読谷村むらおこしの講演会。

沖縄県商工会連合会の前支援部長、四平朝吉さんが経過報告で①文化村づくり（焼ものの里などホンモノづくり）

②商工会自身のむらおこしへの目ざめ
③「新風の目会」による起業などを雄弁に語った。

この「新風の目会」は、むらおこし塾で既に14期生まで輩出しており、塾生OBは各方面で地元のリーダーになっている。

夜を徹しての情報交換。沖縄名物のカチャーシーで締めくくったが、まことに得るものの多い研修会であった。

葉草農園での収穫体験。ヤエマアオキウコンを掘ってみた。片隅にはブラジル原産のシモン手（糖尿病に有効）が植えられていた。



地域が元気になる 『まちの駅』運動

～チイキ！ ゲンキ！ マチノエキ！～

第8回『まちの駅』全国大会 in 甘木朝倉

ふるさと通信

わがまちニユース



今年で8回目を迎えた全国大会は年々、盛り上がりを見せる。手法についても新しいアイデアや体験談が報告され、交流ネットワークの広がりもあり、参加者は多くを学んだ。

「シャッター通り」の言葉のように中心市街地の寂れようは社会問題化しているが、「まちを元気にしよう」と、2月4～5日、『まちの駅』全国大会が甘木市で開かれた。九州では初めて。参加者は主催者の予想を大きく上回る約350人。

既存の商店主が、「ヤル気」になれば「誰でも、どこでも、いつでも」立ち上げることもできる、この『まちの駅』運動。ネットワーク化を図ることで地域全体を元気にし、他県との交流という広域性もあわせ持つことができる。既に全国で500カ所を超え、さらなる広がりを見せる。地域おこしの新たな手法だ。

初日は全体会と5つの分科会。2日目は全国でも活発な甘木朝倉地域の現地視察が行われた。開会式には『まちの駅』連絡協議会の会長、久住時男・新潟県見附市長を始め、地元の塚本勝人・甘木市長、福岡県の井上照明・企画振興部長などが出席するなど盛り上がりを見せた。

5つの分科会では「まちの駅とは？」▽「まちの駅の運営ノウハウ」▽「どんな交流」など、各地での実践報告をも



第2分科会の様子。真剣な報告と討論が交わされた。左から2番目、北九州市の水口さんはユニークな体験談を披露して参加者の関心を集めた。本文参照。

解説

「やれば簡単。」

「力ネ不要」の新手法

「道の駅」は有名で、今や世界銀行の後押しで世界に広がろうとしているが、「み」と「ま」の1字違う後発の『まちの駅』もジワジワと日本全国に広がつつある。両者、何が違うのか。「道の駅」は官の製作、「まちの駅」は民の取組みだ。前者は億(円)単位の予算を食うが、後者はゼロに等しい。決定的に異なるのは前者は車(社会)のもの、後者は歩行者(買物客・観光客)のものという点だ。

『まちの駅』の手法は至って簡単。店先に幟を立て、それと知らせる。お客はトイレ休憩OK、キメ細やかな地元情報(例えば桜の名所、魚釣りのポイント、名物料理など)も入手出来る。店の側にホスピタリティ(もてなしの心)があるから、お客も会話が弾む。お客が買物をしなくても安心して入れる店、その目印が『まちの駅』というわけだ。

先進地、甘木朝倉では59カ所がネットワークを張り、中には酒造場、神社、養蜂場などもあり、同地を訪れた人は「ちよつと見学を」というのも容易だ。さて、店側の心構えだ。再三述べた通り、もてなす心があれば良い。あとは多少の工夫とサービス(地域情報

とに活発な討論と情報交換。

このうち、第2分科会「まちの駅はどうやって立ち上げるの？」では、2人の話題提供者が体験談を語った。その1人、北九州市の黒崎商店街で呉服店を営む水口鉄昭さんはデパート「そごう」の撤退など、すっかり寂れた商店街で考えた。昨年2月、わずか2店舗で『まちの駅』を始めた。「呉服」に引っかけ「ふくろうの駅」とした。地元の宿場町の情報パンフレットを置き、お客のトイレ休憩を「どうぞ」。袋(バッグ)の販売に、フクロウの鳥のフクロウに掛けて店にフクロウの声を流したら評判を呼んだ。少し自信がついた。今、5店舗でネットワーク。「まず、やってみること。お客さんと親しめて楽しいですよ」と弾んだ声だった。

を留意する等)でOK。「ヒト、モノ、カネ」。地域づくりでいつも課題となるこの言葉だが、『まちの駅』はモノ、カネ不要なのが強味。今大会には行政関係者の視察も多く「経済効果は」▽「連効性は」などの質問も出たが、「駅」の主は口々に「ノー」を連発。「そのうち、いつかはお客も買ってくれるでしょう」▽「でも、やっている当方が」ふるさと再発見で楽しい。地域連帯も出てきた」と語ったのが印象的だった。ここに地域おこしのヒントがある。(地域づくりコーディネーター・岡本記)



『まちの駅』の幟。店頭に掲げれば、訪問者は安心して店に入ることができる。良き目印だ。

「住民がふだんから見守ろう」

子どもの
犯罪被害

各地で民間の防犯組織

子供たちが被害者になる犯罪事件が全国的に起きて、社会問題化している中、「もともと地域住民が積極的に子供たちを守るう」と各地で自発的な取組みが進んでいる。このうち福岡都市圏の志摩町、前原市、粕屋町での取組みを紹介する。

「志摩っこ見守りボランティア」

町民151人が登録——志摩町

志摩町では昨年8月から「町青少年育成町民会議」が中心になって「志摩っこ見守りボランティア」を発足。老人クラブや民生委員、スクールヘルパー員ら町民151人に協力を依頼した。

会員は顔写真入りの名札ホルダーを首に下げ、子ども達には信頼感を与え、とともに不審者を警戒する。特別な行動をするのではないが、普段の生活中で子供たちの安全に気を配る。



志摩町の「志摩っこ見守りボランティア」の会員証。これを首から下げる。裏に警察などの連絡先が書いてある。

「子ども見守り隊」を発足

“老人力”を登下校時に——前原市

1昨年3月、塾帰りの女子中学生が男にナイフで切り付けられる事件（未解決）が発生した前原市。当時、前原校区老人クラブ（阿部克雄会長、1200人）も地域防犯対策を協議したが「日常的な協力態勢が必要」と判断。4月から「子ども見守り隊」を発足させる。前原市と連携して、会員たちは腕章やタスキを着用。

子どもたちの登下校時を中心に要所要所で見守る方針。

「粕屋わんわんパトロール隊」

愛犬家が防犯に協力——粕屋町

愛犬を連れて散歩——という姿はあちこちで目にするが、粕屋町社会福祉協議会では、そのような愛犬家に防犯活動の役を買ってもらおうと2月末、「粕屋町わんわんパトロール隊」を発足させた。

隊員に応募したのは43人。町社協は隊員にパトロール隊の大きな名前の入ったエチケットバッグを無料で配布。愛犬の糞の処理にも使ってもらおうと一石二鳥の効果を期待している。

初の景観賞に伊田堅抗櫓（田川市）など二件

第18回福岡県美しいまちづくり賞

第18回「福岡県美しいまちづくり賞」は2月17日、入賞者が発表・表彰された。今回から、表彰要綱が改正され①景観賞②建築賞③貢献賞——の3賞が設定された。

景観賞には応募14件、建築賞には応募57件、貢献賞（生活環境の美化に努める団体が対象）には応募11件があった。

このうち、景観賞では大賞に田川市の伊田堅抗櫓と二本煙突（写真）が、優秀賞には福津市の津屋崎千軒通り藍の家一帯（写真）が選ばれた。

今回で第18回を迎えた「美しいまちづくり賞」。従来は応募要項が「住宅の部」と「まちづくり貢献賞」の2つに分かれていたが、今回から冒頭に述べた通り①景観賞②建築賞③奨励賞——の3賞にすることにした。とくに景観賞は地域づくり活動にとって励みになる。

なお、今回の改正に伴い担当課が変更したのでご注意。景観賞と貢献賞は福岡県都市計画課が、建築賞は福岡県住宅課が担当する。

景観賞 大賞

伊田堅抗櫓と二本煙突



かつて炭坑で栄えた田川市。その面影を残す三井田川鉱業所の伊田堅抗櫓（深さ314m、高さ23m）＝手前＝と二本煙突（高さ45m）。現在、一帯は石炭記念公園に。

景観賞 優秀賞

津屋崎千軒通り藍の家一帯



この周りは明治期、大変栄え「津屋崎千軒」と称された。かつての藍染店「藍の家」は白壁づくりの二階建ての堂々とした構えだ。

子育て支援サロン誕生 母親に 大好評 NPO法人と企業が応援 大野城市

大野城市に1月23日、乳幼児を抱えた若い母親たちが自由に集える『なかよしサロン』が開設された。この背景には、育児支援に取組むNPO法人『チャイルドケアセンター大野城』（大谷清美理事長）と、地元の住宅会社『悠々ホーム』（内山敏幸社長）の協力があり、実現した。このように、企業とNPO法人のバックアップによる子育て支援は大変珍しい。

「地域貢献に」と住宅会社が場所提供

場所は同市筒井4丁目、悠々ホームの住宅展示場の1階。ログハウス風のしやれたつくりで広さは76㎡とゆったり。

毎週月・火・木・金の午前10時半から午後3時半、乳幼児と母親らが自由に訪れ、おしゃべりを楽しみながら子供を遊ばせる。運営協力費として母子で一日50円。「お弁当を持って来て食べ、お昼寝をする人もいます」と世話に当たる福本敬江さん。

ある母親は「家に子と2人であるよりも同年齢の人と話せるので楽しい」と明るく笑った。場所を提供した内山社長は「少しでも地域貢献になれば、と決めた」という。

公的施設でも若い母親たちが集う場がないことはないが、使用時間制限や飲食禁止など、使いにくい所が多い。今回の「民」のフリースペースは歓迎されよう。

今後、いろいろな企画も検討中。連絡は『なかよしサロン』の福本さん。

092(592)6995



部屋は新しく、広く、ログハウス風のつくり。多い日は20組ほどの母子が入りする。下の写真にシャれた外観。

結成20周年で記念シンポジウム 「さらなる前進を誓う」

NPO法人『はかた夢松原の会』 福岡市

「失われた自然とよりをもどし、共に生きる生き方を考えよう」と市民運動に取組む福岡市のNPO法人『はかた夢松原の会』（川口道子理事長）が結成20周年を迎え、1月15日、福岡市のアクロス福岡・国際会議場で本格的な記念シンポジウム「みんなで語ろう 環境とまちづくり」を開いた。

『はかた夢松原の会』が結成されたのは昭和62年3月。福岡市の人工海浜「シーサイドもち」に「市民運動で松を植え、白砂青松を復元しよう」とスタートした。福岡市港湾局との連携のもと、運動10年目にして東西2・5km、最大幅30mの松林が完成。今では都市住民の貴重な憩いの場となっている。

松の植樹運動は今も続く。運動は広がり、玄界灘に面する各地の市民団体が年1回集う『沿岸松原サミット』も今年で9回目を迎える。この20年間に松の植樹に始まり、生命の源である「水」、その水を運んでくる「川」や源流域の「森や山」、さらには「海」や「都市」、「道」といった多くのテーマで広く自然や環境の問題について取組んで来た。先頭に立つ川口理事長は「みず、みどり、みちをキーワードに今後、さらに運動を展開して行きたい」と語る。

地域づくり誌「優秀賞」福岡県から2点 地域づくり活性化センターが全国表彰

（財）地域活性化センターは「平成17年度地域づくり誌・ホームページ コンテスト」の結果を発表。「地域づくり誌の部」で優秀賞（最高賞）として全国3点のうち福岡県から2点が入賞。3月9日、地域づくり団体全国協議会総会の席上で

表彰された。おめでとうございます。

優秀賞に輝いたのは①「市民の手づくり文化情報誌『カルキヤッポ』カルキヤッポくるめ通信」②「久留米市ふるさと文化創生市民協会刊②『筑後川新聞』」NPO法人・筑後川流域連携倶楽部刊の2誌。



A四判12頁。年6回、1回10万6千部発行。久留米市の市報と一緒に全戸（約7万戸）配布される。講演会、映画、祭など市内のキメ細かな情報を満載。



タブロイド判8頁。年6回、1回1万5000部発行。筑後川流域のさまざまな情報が網羅されている。民話あり、元氣人あり、企業ありと盛り沢山。

旧吉井町（現うきは市）は白壁土蔵の似合う街。この地で活躍する女性団体「白壁レディース21」はその名にふさわしく、鮮やかに輝いてみえる。会員は現在20人。多い方ではないが、1人ひとりがそれぞれ他にも幅広い活動をしており（後述）、その存在感は大きい。

結成されて今年で13年目。思い立ちは「母親として女性として、子ども達が将来、喜んで住める、安心して住める町にしたい」と、主に子ども達に愛情を注ぐことから始めた。勉強を兼ねた講演会▽先進地視察▽カンボジアの学校に楽器を送る支援運動など数年間の「助走期間」を経て、平成10年9月から

毎年1回、本格的な教育講座「ハラハラどきどき子育て講座」を開講。好評を博し、平成15年7月の第6回講座は設立10周年記念事業も兼ね、講師に評論家の柳田邦男氏を招き、絵本の話を語ってもらった。昨年で8回を数えた。

「この講座を聞くと安心する」と若い母親達の感想。代表の高橋さんはそれを聞くにつれ「先輩母親として、また自分達の子育ての反省も含め、これからも

「子育て」の手助けをしよう」と思う。

もう一つ。会が力を注ぐのは郷土の先達、江戸時代の5人の庄屋が命をかけて建設した地元の長野井堰、大石井堰の史実を大型紙芝居に仕立て、学校や地元を巡る公演活動。平成13年から「郷土の再発見に」とボランティアで取組む。

2月に福岡県教育文化表彰

このような会の活発な活動に対し今年2月、福岡県教委から福岡県教育文化賞が贈られた。「励みになりました。でも私達、やっついて楽しいから続くのです

女性の視点でまちづくり

うきは市 白壁レディース21

よ」と事務局長の熊懷さん。「無理をしない。まずは楽しくやろう」が会のモットーだ。会員達はホンネで語りあう。「後を引かないこと」が不文律である。資金づくりに全員が汗を流してバザー出店。食事会や趣味の会。



高橋さん（右）と熊懷さん。月1回の定例会で、あれだけ話したのに、また会うと話が弾む。



学校の出前授業などに好評な大型紙芝居『五人の庄屋』。全20枚あり、1枚は1・2m×80cmもある。上演にはナレーターを始め、8人がかり。江戸・寛文期の五人の庄屋の偉業は、現代では大人も知らない人が多く、一般社会教育の教材にもなっている。井堰は現在も立派に機能している。現代の水問題、環境問題に対する教訓が大きい。

先進地視察を兼ね、いろんな全国大会への参加……と、まことに活発だ。

それだけではない。熊懷さんは、うきは市の現職の教育委員。高橋さんは永年、（財）がんの子どもを守る会（本部・東京）の運動に取組み、九州北支部（福岡大分）の代表を務める。来月6・7日、上海で開かれる世界小児がん学会の下準備のために最近、中国訪問を終えたばかり。会員の皆さん、本当に忙しい。

団体概要

- 代表 高橋和子
 - 事務局長 熊懷勝子
 - 設立 平成5年5月
 - 会員 20人
 - 連絡先
- 〒839-1312
うきは市吉井町清瀬592-1
☎0943(75)2294

「企業メセナはバブル後も健在」 15周年記念 福岡シンポジウム 企業メセナ協議会が開催

社団法人「企業メセナ協議会」（本部・東京）は2月8日午後1時半から福岡市のイムズホールで、協議会発足15周年の記念シンポジウム「文化で魅力ある地域づくり」市民、企業、行政の役割」を開いた。第一部はまず基調講演。協議会の副会長で元朝日新聞社長の中江利忠氏が「21世紀は文化革命の時代に。芸術文化活動を通して心豊かな市民社会の建設を」と呼びかけ、企業メセナのさらなる進展の大切さを説いた。続いて「企業の役割」と題して九州電力、三和酒類（大分県）、福岡総本舗（佐賀県）の経営トップがアサヒビール役員の司会で討論。

地域社会の一員として企業が芸術や文化の活動を自ら行い、あるいは地元の活動を支援する「メセナ」の具体例が率直に語られた。企業の熱意や努力もさることながら、地域づくりをめぐる行政や市民、NPOなどとの連携や役割分担の重要性も強調された。

また、当シンポジウムで「企業メセナ活動のヤル気はバブル後も変わらない」との興味深い報告がなされた。2004年、企業のメセナ支出額は全国で233億円、1社平均で6200万円（協議会関連）であった。各地の地域づくり関係者にとって、気になる数字である。

こんにちは

地域づくり団体訪問

シリーズ⑪

福岡市の市民ボランティア「あすみん消しゴム隊」代表

じょう じ 森 畑 さん (52)



ひと模様

ビルの壁や家の塀に「これ見よ」とばかり派手なカラースプレーを使って、秘かに実行される「落書き」。眉をひそめる人は多いが、行政当局も放置状態。なぜなら、役所が安易に住民の私有財産（民家など）に関与できないからだ。

「それなら、市民ボランティア活動で汚い落書きを消してしまわろう」と福岡市で運動が始まって2年4ヶ月。その動きの中心に森畑さんがある。

街中の汚い落書きをゴシゴシ消して回る

森畑さんは福岡市内の現職の郵便局長。公務のかたわら永年、市民ボランティア活動に参加して来た。活動団体の名前を「あすみん消しゴム隊」という。

少し解説が要る。この活動の

バックグラウンドには「官と民」の連携がある。福岡市NPO・ボランティア交流センター「あすみん」が設立されたのは平成14年10月。「あすみん」は愛称で「明日の市民」の意。設立当初から一市民の立場で運営委員に加わった森畑さんが仲間と呼びかけて「消しゴム隊」を旗揚げした次第。

ある日の活動風景。朝10時ごろ、50人ほどのボランティア市民が繁華街の一角に集う。子供連れの母親、高校生、定年退職者などさまざま。各自が洗剤やタオル、タワシなどを手にしている。塀や壁の落書きに

向かって、まず洗剤をかけ、タワシでこすり、様子を見ながらスポンジで細かい汚れを落す。最後はペットボトルの水で洗い流す。言うのは簡単だが約2時間の作業。参加者の額には汗が流れる。溶剤のシンナーのにおいにむせ、白い軍手も赤や黄の色に染まる。

「でもね、皆さん一緒に汗を流すことで、終わった後のお茶の一杯や会話の何と楽しいこと！」。民家などからは感謝される。自然に人の輪が広がり、顔見知りになった人同士が集まったり、「あすみん」を場に新たな人の交流が始まった。それを傍で温かく見守る森畑さんである。

連絡先

〒810-0041 福岡市中央区大名2の6の46
福岡市NPO・ボランティア交流センター「あすみん」
092 (724) 4801

お知らせ

地域づくりネットワーク福岡県協議会から

本文にもありますように、飯塚市で開催しました研修交流会は無事終了しました。無事開催できたのは住学協同機構「筑豊地域づくりセンター」の皆様をはじめ会員の皆様のご助力のおかげです。たいへんありがとうございました。

研修交流会は今回で県内を一巡しました。これまでの大会を踏まえて、次回以降の大会を検討していきたいと考えています。会員の皆様の中にアイデアをお持ちの方

がいらっしゃいましたらご一報いただければありがたいです。

さて、協議会では、皆様の地域づくりの一助として「地域づくりコーディネーター」を派遣しています。是非ともご活用ください。

また、協議会のホームページに会員の皆様のプロフィールを掲載しています。このプロフィールは会員の皆様自身によっても書き換えが可能です。詳しくは事務局まで。

協議会事務局担当・川上

地域づくりコーディネーターの目

その②①

岡本顕實

今年2月25日、飯塚市で開かれた第4回「福岡県地域おこし研修・交流会」。

その詳細は本誌1・2頁を見て頂きたいが、私は正直なところ、筑豊の人々の地域づくりに寄せる熱い思いと純粋な活動に感動した。初め、私は「どのような集会になるのだろうか」と多少、心配であった。というのは県下4ブロックのうち、筑豊ブロックは当協議会の登録団体数が最も少なく（県下191団体、筑豊ブロック22団体）、普段、筑豊での動きがよく伝わって来なかったからだ。

だが、それは全くの杞憂であった。元来、気な活動を裏付ける多くの力強く、美しい言葉が心に響いた。そのひとつに「子育てするなら筑豊で」というのがあった。「何もない筑豊」という悪口があるそうだが、だが、集会に参加したある男子高校生は「何もない魅力、が僕は好き。逆に自然が、ふるさとがある」と発言した。恵まれた自然と豊かな人情。地域づくり運動を担う中核に女性が多いのも心強い。

一方、地域全体を束ねる役割の地元の近畿大学の存在意義も極めて大きい。学習、情報、交流のキーステーション。まさしく「開かれた大学」だ。県下に大学は数多いが、同大ほどの前向きなところはない。改めて敬意を表したい。

地域づくりネットワーク福岡県協議会
〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7 福岡県庁 地域政策課内
TEL.092-651-1111(代表) FAX.092-643-3164
http://www.chiikinet-fuku.org